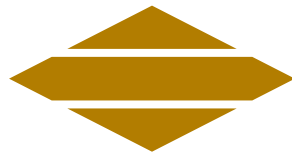


MIHARA

100th Anniversary



MIHARA

100th Anniversary Special Publication

AESTHETICS	美意識	4
MIND	百年企業の心意気	6
VISION	未来へ	8
HISTORY	100年の軌跡	12
MILESTONES	100年譜	16

三原産業とは “何者なのか”

原点：
ふたりの出会い

三原産業の設立時の社名「堀部彦次郎商店」に名を残す堀部彦次郎は、宇和島銀行頭取、宇和島商工会議所初代会頭を務めるなど、その類まれな指導力をもって、明治から昭和にかけて宇和島経済界を牽引し、県議員・衆議院議員ともなった人物。とりわけ運輸・交通の整備を地域経済の基盤として重視し、海運の宇和島運輸をはじめ、宇和島鉄道、宇和島自動車の社長を歴任して「運輸王」とも呼ばれた。その腹に私利私欲はなく、常に地元の発展・繁栄に全力を注ぎ、宇和島のだから敬愛される存在だった。

三原理吉が家業の発展を志して会社を設立するにあたり、この堀部が初代社長就任、さらには自らの名を冠した社名の使用をも承諾したことは、自分の志を受け継ぐ者として、理吉にいかに大きな信頼と期待を寄せていたかを物語っている。

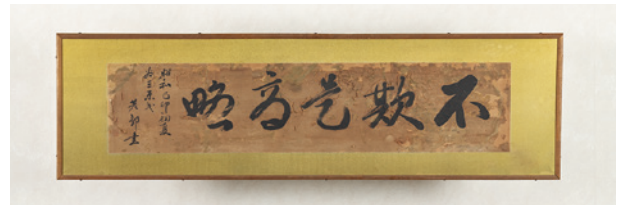
そして理吉はその信頼に応え、実質的な経営者として会社を順調に発展させただけでなく、会社を離れても堀部と心ひとつに働いていたことが、当時の記録に残っている。

「不欺是商略」(欺かざる、これ商略)

正直誠実に相手と接すること、損か得かでなく正しいか間違っているかで判断すること、それこそが「商略」すなわち商売成功の基本であると教える。

出典は不詳だが、揮毫・額装されて理吉の部屋に飾られていたというこの言葉は、当時から社訓のように捉えられていたと思われる。

現会長・興二は社長就任当初、この言葉をあらためて全社員に示し、三原の心の拠りどころとした。



奢らず、誇らず

オイルショックとバブル崩壊を社長として切り抜けた興二は、「まじめにやっていたら売上げは伸び利益も上がるいい時代。苦勞したことはもちろんあるが、思い返せば試練というほどのものはなかった」と、淡々と振り返る。

多くを語らず、奢らず、誇らず、ただやるべきことをやり、預かりものを受け渡す。そのありようは、継続と発展を支える「隠れた貴重な存在」を垣間見せるもの、百年企業を育む土壌にほかならない。

利他の心の連鎖

まず自らが社員の、社員がおお客様の、会社が地域の「役に立つ」こと——現社長・英人は「利他の心」を経営の基本とし、三原が人・社会・万物への豊かさの連鎖の源となることを目指す。

南予から、世界を見渡す視野

宇和島という港町に拠点を置き、海運の雄・堀部彦次郎の薫陶を受けたこと、当初から石油という国際商品を扱っていたことから、当時本州との行き来もままならなかった四国・南予地域にありながら、三原は早くからグローバルな視野を備えることになった。

100年を経て磨かれたその「眼」が、世界を見通す三原の新しいビジョンを描く。



初代社長 堀部彦次郎



創立者・2代目社長 三原理吉



3代目社長 三原卓蔵



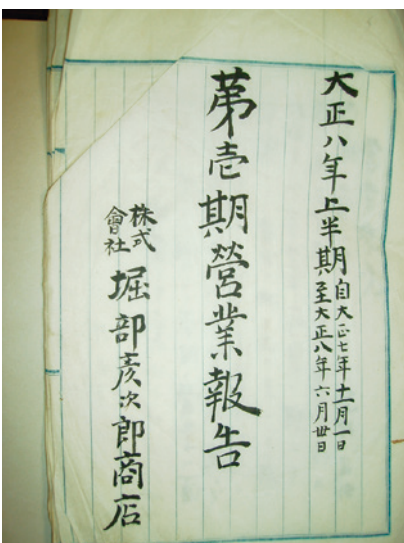
宇和島・大正初期



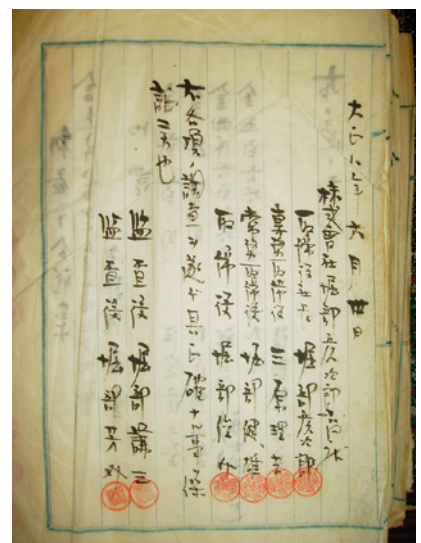
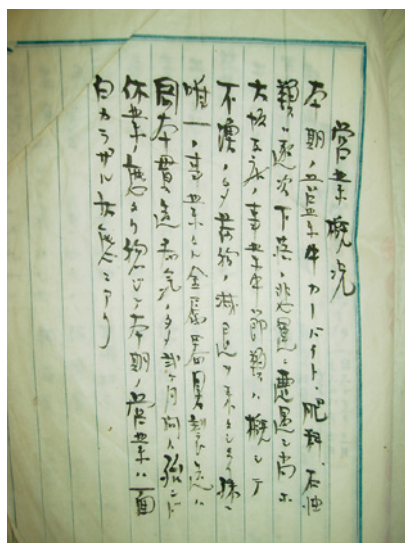
宇和島油槽所



宇和島・戦後



堀部彦次郎商店時代の営業決算報告書



MIND

百年企業の心意気



三原産業株式会社
代表取締役社長
三原英人

「1年を思う者は花を、10年を思う者は木を、100年を思う者は人を育てよ」――

人を育て、人に育てられた三原産業の思いは、100年を経て今に届けられた。
創業者から4世代目にしてその節目を担うこととなった英人社長が、新たな100年への思いを語る。

100年の継続を支えたもの——

創業者・理吉が大事にした「欺かざる、これ商略」という言葉は、今も変わらず当社の信念であり、継続と発展の根底に流れているものだと思います。

お客様・関係先に対して誠実であろうとしてきたこと、商売だけでなく、地域のいろいろな経済活動にも貢献していこうという気持ちを常に持っていたことは、創立当初から、石油という暮らしにも産業にも必要とされる商品を扱い、地域に不可欠なエネルギーの供給を、時代に合う形で事業の柱として続けてきたことともつながっているのではないのでしょうか。

こうした事業を通じて、100年をかけて培われた地域でのお付き合い、信用・信頼は、当社のかげがえのない財産であり、この先の新たな挑戦の土台となるものです。

私にとっての三原産業——

三原家の長男として生まれ、会社のトップにいるということは、家族はもちろん、社員やその家族、取引先、関係ある人たちを幸せにしたいという「使命」のようなものがあるのだと感じています。

使命とは、まさに「命を使う」と書きますから、会社は私の人生の一番まん中であって、全霊をもって向き合うものです。

働く上で大切にしていること——

「心を高める、経営を伸ばす」——ある経営者の言葉です。

心を高めるとは「利他」、つまり人のためにという心を大事にすることだと私は考えています。それが回りまわって自分の目指すもの、あるいは経営を伸ばすこと、会社の繁栄にもつながっていくのだと思います。

経営はもちろん、そもそも働くということは、お客様に接するとき、何かを提案するとき、常に判断の連続です。その際に基準となる、だれもが納得するような、昔から受け継がれてきた大事な価値観を持っていれば、好き嫌いや損得でなく、善悪で判断することができ、その決断は、長い目で見ると決して間違いにはならない。仕事においても人生においても、よい結果につながると思っています。

見据えている未来——

鳥瞰的な視点をもって発想を切り替えることができなければ、これからの時代に継続・繁栄は望めません。

三原の主要な事業分野であるモビリティ(移動手段、人や物の動きやすさ)とエネルギー、あるいは人と自然、南予と世界、そうしたものを境目なく見通し、調和させる、三原ならではの包括的ソリューションを提供し、未来インフラの創造に貢献する。それによって、わが国でも先頭を切って高齢化・過疎化が進むこの四国西南部という地域において、次の時代の人々の豊かな暮らしの形を描き、それを日本・世界に拡げていく——そんな、100周年にふさわしい気概をもって、この先も三原らしい創造革新に取り組んでいきます。

後に続く人たちへ——

「伝統と革新」と言いますが、伝統は、それを受け継ぐためにいろいろなものを変えてこそ、守れるのではないのでしょうか。

三原産業が扱う商品は、100年の間にずいぶん変わってきました。しかしそのベースには、常に自分たちを見つめて、お客様、地域のために、「どうすればお役に立てるか」を追求する利他の心があります。

この大事な心の部分は、これからもずっと守り続けてほしい。そしてそのためにこそ、貢献のしかた、事業の形は時に応じて大胆に変えていってほしいと思います。

VISION

未来へ

森羅万象が循環する

地域のモビリティ&エネルギーの未来図を描き形にする

MIHARA

三原産業のビジネスの柱であるモビリティとエネルギーは、
あらゆる人々の生活の土台を支えて、社会経済の基礎インフラの核となるものです。

また、三原が拠点を置く愛媛、そして四国は、

少子高齢化に伴う様々な課題を抱える一方、豊かな地場産業を育み、
再生可能エネルギーの源ともなる自然資源に恵まれた地域でもあります。

創立100周年を迎える三原は、日本の宝である分厚い歴史・文化を蓄えた
地方都市や中山間地域の社会経済の課題を解消し、
その可能性・潜在力を伸ばすことにコミットしています。

モビリティとエネルギー、自然と人、南予と世界を境目なく見通し調和させる、
三原ならではの包括的ソリューションの提供、未来インフラの創造を目指す——
100年のその先へ、私たちは歩み続けます。



三原が綴る新しい「神話」

『古事記』によれば、イザナギ・イザナミの二神が
「大八島」(日本列島)をつくったとき、
最初に淡路島を、次に伊予・四国を産み、
それから九州・本州など八島を順次産んでいったという。
あたかもこの「国産み神話」を綴り直すかのように、
淡路島にルーツを持つ一族が愛媛に三原産業を興し、
そこで描き始めた新しい地図は、四国から日本列島へ、
そして世界へと展がり続ける。



HISTORY

100年の軌跡



三原興二会長と英人社長

■ 会社創立者・理吉の時代

三原家のルーツは兵庫県・淡路島の南部にあり、その姓は、平安時代からの歴史を持つ「三原郡」の地名に由来するという(同郡は平成17年の町村合併で廃止)。

そこから宇和島に移り住んだ三原家は、やがて「淡路屋」の屋号でカーバイド・肥料・石油などを扱う個人商店を営むようになっていた。

大正7年、三原家6代目の理吉は、この淡路屋の事業を主体に、多くの人の出資を得て、株式会社堀部彦次郎商店を設立、これが三原産業の原点となる。

堀部彦次郎は、交通・運輸の整備を重視して地元の発展に尽くした、当時の宇和島経済界の重鎮。その堀部が理吉に全幅の信頼を置き、会社設立に際して出資のみならず、自らの名前を社名とすることを許し、初代社長も引き受けて後押ししたのだった。

同社の実質的な経営は、理吉が専務取締役として担ったが、堀部の名がその滑り出しにおいて、大きな力となったことは疑いない。一方理吉は、本業である燃料の供給で堀部の事業を支えただけでなく、堀部の様々な活動をよき協力者として助け、その信頼に応えた。

堀部は昭和5年に死去するが、堀部への敬慕の念が強かった理吉はあえて社長の座を空席とし、専務のまま代表者となる。同社はその後全株式を三原家が取得し、昭和18年に商号を参原産業株式会社と改称、さらに昭和25年に三原産業株式会社と改称するが、理吉はこれを機にようやく社長に就任した。

会社草創期の様子は、創立第1期から太平洋戦争が激化する昭和18年6月の第49期(各年上・下2半期)まで、欠けることなく残されている、営業決算報告書からうかがい知ることができる。そこには第1次大戦後のヨーロッパの情勢などが克明に記されており、石油という国際商品を扱っていた同社が、当時からグローバルな視点をもって経営を行っていたこともわかる。

報告書によれば、堀部彦次郎商店は、もともと扱っていた肥料や燃料だけでなく、金属加工や食品の製造・販売なども手がける多角的な事業を展開していた。

肥料事業は配合肥料の製造・販売および化学肥料の販売を行っていたが、当初は地元漁港で集めた魚粉なども扱っていた。さらに、宇和島の消費者のための問屋機能を果たすと同時に、地元の産物を集めて域外に送り出すという、商社的な事業によっても地元経済に貢献していた。

分野を問わず地域のために何ができるかを考え、いち早く実行する——その姿勢は、堀部から理吉へ、そして三原産業へと確かに引き継がれ、百年企業の礎となった。

■ 卓蔵社長が築いた事業の基盤

理吉の長男卓蔵(たかぞう)は体格のよいスポーツマンで、所属していた慶応義塾大学の端艇(ボート)部がロサンゼルス五輪の日本代表に選ばれながら、理吉が海外渡航を許さなかったためにチームに加われなかったというエピソードが残る。

大学卒業後、直ちに堀部彦次郎商店に入社、理吉のもとで商人として、また経営者として研鑽を積んだ。

日本は昭和10年代なかばから、戦時体制が強化されて統制経済の時代に入り、会社は事業で扱うものの大部分が配給物資となるなど、思うに任せない商いを強いられた。その中で卓蔵は、常務として理吉を支えて堅実な経営を続け、戦後の混乱期も乗り切った。

卓蔵が社長に就任したのは、理吉が死去した昭和31年のことだが、実際には、そのかなり以前から、理吉に代わって実質的に経営を担っていた。

HISTORY

100年の軌跡

社名を三原産業と改めて間もない昭和28年、卓蔵は、経営が難しくなった松山の日愛石油株式会社を三原グループに吸収(のちに三原石油と改称)、これにより、松山での石油事業が本格化する。

また昭和45年には、岩谷産業株式会社よりガス充填所を買収、エネルギー全般を扱う企業としての基礎を固めた。

また卓蔵は、宇和島商工会議所会頭や愛媛県石油商業組合理事長等も務め、地元の財界および業界にも積極的に貢献した。

なお、この県石油商業組合理事長は、後に興二・英人と三原の3世代の社長が務めることになるが、このような例は全国でも数少ないとされる。地元業界・経済界での三原の信頼の高さを示す証左といえるだろう。

こうして卓蔵は、将来を見通す的確な経営判断により、現在そして今後も三原のビジネスの柱となるエネルギー関連事業を拡大し確固たるものに育て上げるとともに、松山地区に事業拠点を確立したのである。

■ 興二社長の経営改革

現会長の興二は卓蔵の養女(妻の姪)と結婚し、卓蔵の養子となった。自分の後継者となるべく三原家に入った興二に対し、卓蔵は大変厳しく接した。

興二は大学では化学を学び、卒業後4年間、繊維加工会社で技術畑の仕事をしていた。そのため、昭和35年に三原に入社した当初は、まず経理など経営に必要な知識を、一からひたすら勉強した。

40年からは松山のグループ会社に常務として勤務、53年、卓蔵が亡くなったため宇和島に戻り、社長に就任する。

興二が社長としてまず力を入れたのは経営の「近代化」だった。時代を先取りして拡大・発展する事業内容に見合うよう、経営体制に残っていた古いシステムや体質を一掃していった。

例えば興二は、期首ごとに経営計画書を作成することとした。当初は社長自らが、部門長たちの話を聞き取って作る簡素なものだった。

そして興二は、この経営計画を社員全員(現在は幹部社員のみ)を集めて発表、これを、社員に社長の思い・志を伝えて社内の志気を高める特別なコミュニケーションの機会としても活用した。創業者・理吉が大事にした「欺かざる、これ商略」の言葉も、この場で再三取り上げることで、あらためて三原の心の拠りどころとした。

また、当時三原産業の株式は三原家が100%保有していたが、興二はあらたに株式会社伊予銀行と日本石油株式会社(現JXTGエネルギー株式会社)の資本参加を得て増資し、経営の客観性・透明性を高めた。

さらに社員持株制度も導入、株式の一部を社員に安価で分配した。これは、興二の社員を重視する経営姿勢の表れでもあり、経営者と従業員の一体感、働き手の意識と意欲を高めることにもつながった。

このころ、石油・ガスのエネルギー事業は、原油価格の高騰もあって、売り上げの九十数%を占めるようになっていた。興二は子会社だった三原石油を吸収合併、また非効率だった製粉事業を廃止するなど、経営の統合・整理を進めた。

そして、高度成長期ただ中に到来したカーライフ時代に対応し、直営のスタンドを最大23店舗まで増やすなど、成長するビジネスには積極的に投資していった。

また、興二が愛媛県石油商業組合理事長を務めた当時、四国の石油販売業者で設立していた四国石油業厚生年金基金は、石油需要の伸び悩みと給油所のセルフ化による従業員(加入者)の減少により、将来的な破綻が見え始めていた。そこで興二は基金の理事長としてその

解散を決断、県内のみならず他県の説得に奔走し、迅速に整理を進めた。その結果、加入者の損失を最小限に抑えることができたのだった。

興二は自らが会社を率いた時代を、まじめにやっていたら売上げが伸び利益も上がる恵まれた時代だったと謙虚に振り返る。しかしそれは、オイルショックによる原油高騰、バブル景気とその崩壊という、一步間違えれば大企業ですら消し飛んでしまうような激動の時代でもあった。

興二はその決断力・実行力をもってそれを乗り越え、「不欺是商略」の羅針盤のもと、社員・顧客・地域の「役に立つ」ことを考える姿勢を貫いて、事業の軸を揺るがすことなく、会社を発展に導いたのだった。

■ 転換期の経営を引き受ける英人社長

現社長の英人は、興二の長男として宇和島で生まれて松山で育ち、興二の社長就任前に宇和島に戻った。大学を卒業後、東京の企業で社会人・職業人としての経験を積み、愛媛に戻って三原に入社した。

平成11年、興二が会長となり、英人は社長に就任する。日本経済はバブル崩壊後の長い低迷期に入っており、人々の生活・ニーズの多様化も進んで、企業の舵取りは非常に難しくなっていた。

とりわけ、三原の事業の主軸である石油・ガスについては、資源枯渇と環境破壊というふたつの危機感が世界的にも高まり、需要の大きな伸びは期待できなくなっていた。

利益追及の経済活動だけでは会社経営が立ちいかない時代に突入したことを感じ取った英人は、人の心を大切にしてきた三原の事業の本質を伸ばし生かすことに、あらためて重きを置いた。

そして、共に働く社員が幸せに、充実して仕事ができる環境をつくるのが、顧客の満足、会社の繁栄、地域への

貢献につながると考え、三原独自のフィロソフィをまとめて全社で共有するなど、働く「場」としての会社の改革に力を注ぐ。

その上で英人は、ビジネス環境の激しい変化への対応力を備えるべく、事業の多角化を進めている。

柱であるエネルギー事業については、太陽光発電、燃料電池という環境性能に優れた新エネルギーを商品に取り入れ、さらに、エネルギープランの提案力を強みとするリフォーム事業も加えた。

また、従来燃料油の供給という形で側面から関わってきた自動車について、英人の社長就任前後から中古車販売、車検・整備、钣金、自動車保険などのサービス、そしてスタンドのネットワークを生かしたレンタカーなど事業の拡充を進め、もうひとつの柱とした。

さらに、地元の水産業・農業の支援・振興に主眼を置く食品関連事業にも力を入れ始めた。複数の会社を買収・グループ会社化して、生産・販売体制を整えつつある。

このような現在の三原産業の姿は、実はその原点、すなわち、燃料を商う理吉が交通・運輸に目を向けた堀部と出会い、二人の共通の志である地元・宇和島、愛媛の発展を目指した、そのときに立ち還るものでもあるといえるだろう。

しかしもちろん、それは単なる原点回帰ではない。

折しも現代社会は、消費から循環へ、物の豊かさから心の豊かさへ、価値観の大転換を求められている。人の心を大切にしてきた三原が、100年かけて築いた地域との豊かな関係と、モビリティとエネルギーの分野での強みを生かして、社会の転換の成취に貢献する役目を果たすときが、まさに100周年の節目に到来しているのである。

こうして三原は今、理吉と堀部の志と、卓蔵、興二、英人の歴代社長の志、そして社員たちの志をひとつに束ねて再び原点を踏みしめ、新たなビジョンのもと、「100年のその先へ」の扉を開こうとしている。

MILESTONES 三原産業100年譜

・は同時期の社会の出来事(年代は省略)



1918(大正7)年10月28日

株堀部彦次郎商店創立
大阪支店開設

1919(大正8)

船越支店開設

・日本石油(株)が初のガソリンスタンド(ビジブル式)開設

1922(大正11)

肥料製造工場開設

・関東大震災発生

1927(昭和2)

宇和島油槽所(石油貯蔵所)落成
製麺工場落成

1930(昭和5)

土佐清水出張所開設

1931(昭和6)

八幡浜支店開設
久良油槽所落成

1934(昭和9)

岡山宇野港に石油配給所開設(41年廃止)
大阪出張所開設(97年廃止)

1935(昭和10)

八幡浜油槽所落成
石油運搬船・八千代丸建造

1938(昭和13)

尼崎出張所開設(41年廃止)

・日中戦争勃発 ・石油消費規制実施 ・第2次世界大戦勃発

1940(昭和15)

宇和島石油共同配給組合結成
製粉機設置

・ガソリンの民間消費禁止 ・石油販売取締規則施行(灯油・軽油切符制)
・太平洋戦争勃発

1943(昭和18)

参原産業(株)に社名変更

・石油専売法施行 ・第2次世界大戦終結

1949(昭和24)

久良出張所開設

1950(昭和25)

三瓶出張所開設
三原産業(株)に社名変更 三原理吉が2代目社長に就任

・朝鮮戦争勃発

1952(昭和27)

日本石油(株)と特約販売契約締結
大洲出張所開設

1953(昭和28)

宇和島給油所開設
日愛石油(株)を三原グループに吸収

1955(昭和30)

八幡浜給油所開設(現DD八幡浜店)

1956(昭和31)

三原卓蔵が3代目社長に就任

1959(昭和34)

大洲給油所開設(現DD大洲店)

・石油輸出国機構(OPEC)設立

1961(昭和36)

松山給油所開設(現DD松山店)

・東海道新幹線開業 ・東京オリンピック開催

1965(昭和40)

宇和給油所開設(現DD宇和れんげ店)

1966(昭和41)

日本石油瓦斯(株)と特約販売契約締結
宮西給油所開設(現DD U-TIME21店)

1967(昭和42)

宇和島丸之内給油所開設(現DD Castle Avenue店)

1968(昭和43)

南宇和給油所開設

1969(昭和44)

内子給油所開設(現DD内子店)

1970(昭和45)

ガス事業所を開設(岩谷産業(株)より充填所を買収)
日愛石油(株)を三原石油(株)に社名変更

1972(昭和47)

保内給油所開設

・OPECペルシャ湾岸6カ国が原油価格を大幅値上げ
(第1次オイルショック)

1973(昭和48)

保田給油所開設

1976(昭和51)

損害保険代理業開始

1978(昭和53)

三原興二が4代目社長に就任

・イラン・イラク戦争勃発(第2次オイルショック)

1981(昭和56)

総合倉庫・配送センター開設(宇和島)

宝飾事業開始(京セラ・クレサンペール販売)

1982(昭和57)

平井町給油所開設(現DD平井町店)

1983(昭和58)

三原石油(株)を吸収合併 松山市に支店開設

1984(昭和59)

大洲東給油所運営開始(現DD大洲東店)

1986(昭和61)

社員持株制度導入

1989(平成元)

鶴島瓦斯(株)の事業継承 一般高圧ガス取扱い開始

CAMELLIA33店開設

1990(平成2)

日本石油(株)・(株)伊予銀行の出資を得て増資

・湾岸戦争勃発

1993(平成5)

ガス事業部充填所改造 充填施設・オートスタンド開所落成

三原松山ビル落成 松山支店移転

・阪神・淡路大震災発生

1997(平成9)

ガス事業部南宇和営業所開設

松山支店を松山本社に改称

1998(平成10)

中古車販売事業開始

三瓶町的气体販売店・菊池商店の事業継承

1999(平成11)

(株)神戸電気工業(LPガス事業者)買収

三原英人が5代目社長に就任

2000(平成12)

坊ちゃんST店開設 車検工場を併設

三原興二会長が藍綬褒章受章

SSのDr.Drive(DD)化開始

2002(平成14)

宇和島本社新築移転

2003(平成15)

宇和島油槽所の運営開始

DD大洲東店に車検工場を併設 軽板金事業を開始

2005(平成17)

DD坊ちゃんST店をセルフ化

三原興二会長が旭日小綬章受章

2006(平成18)

DDセルフ谷町店新設オープン

2007(平成19)

DD CAMELLIA33店をスプリット型SSへ改装

2009(平成21)

トクワカ商事(株)を株式譲渡によりグループ会社化

きさいや寿町SS開設

2011(平成23)

太陽光発電システム事業開始

・東日本大震災発生

2012(平成24)

レンタカー事業開始

コンビニエンスストア(サークルK)事業開始

(現ファミリーマート松山インター北店)

2013(平成25)

(株)村上商事を営業権および設備買収により

事業継承・グループ会社化

宝水産(有)を資本買収によりグループ会社化

2014(平成26)

三原ほけんプラザ(株)設立

(有)西崎石油店のガス事業部門買収

2015(平成27)

宇和島車検工場設立

アスクル事業開始

(有)浦田商店を資本買収によりグループ会社化

岩崎百貨店のガス事業部門買収

(有)スズラン販売のガス事業買収

2016(平成28)

(株)ナンスイを資本買収によりグループ会社化

2017(平成29)

宇和島車検工場で重板金事業開始

2018(平成30)年10月28日

三原産業(株)創立100周年記念式典

三原産業株式会社
MIHARA Co., Ltd.

創立／
大正7年10月28日

代表者／
代表取締役社長 三原英人

事業内容／
石油類卸・小売、LPガス、高圧ガス、リフォーム、肥料、飼料、食品卸小売業、クレサンベール宝飾品販売、
損害保険代理業、新車中古車販売、カーリース、車検、钣金修理、太陽光発電システム、レンタカー、
コンビニ事業、アスクル、モビリティ&エネルギーソリューションの提供 など

グループ会社／
トクワカ商事株式会社
株式会社村上商事
宝水産有限会社
有限会社浦田商店
三原ほけんプラザ株式会社
株式会社ナンスイ

宇和島本社
愛媛県宇和島市寿町二丁目9番12号
0895-22-5656

松山本社
愛媛県松山市味酒町一丁目4番11号
089-947-1170

info@e-mihara.info
www.e-mihara.info

100th Anniversary Special Publication October 28th 2018
Photo by Makoto Tomioka [P4, 6, 11, 12]
Produced by Yaoyorozu-ING

Copyright 2018 MIHARA Co., Ltd. All Rights Reserved.